



Title	永正三年笛彦兵衛伝書『龍吟秘訣』
Author(s)	天野, サチ
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 439-461
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

永正三年笛彦兵衛伝書『龍吟秘訣』

天野 サチ

【龍吟秘訣】は、早稲田大学演劇博物館所蔵になる、永正三

(一五〇六) 年原奥書を有する、桧垣本栄次(彦四郎・彦兵衛)の笛
伝書の転写本である。彦兵衛は、『四座役者目録』によれば、「左
衛門が弟子也。若名彦四郎ト云。名字桧垣本ト云。世話ニ笛彦
兵衛ト云。大成男ノカシラニ白キナマズノアル人ト也。名人也。

(中略) 大永七^{タツ}^{タツ}比果ル。」とある。尤も、この没年に関しては、
江島伊兵衛氏が、鴻山文庫蔵彦兵衛伝書『遊舞集』に、死後の
はずの天文六年の在判奥書がある事を根拠に、「喜多」昭和
十一年二月号ニ、笛彦兵衛尉吹初メ美濃彦兵衛ト云ヒ、文明
十二年——天文十九年在世、行年七十一トアリ。四座目録ハ大
永七年頃卒トアリ。此本ニハ、次ノ如ク天文六年在判ノ識語ヲ
写セリ。大永七年没ハ誤リナラン。【喜多】説ヲ採ルベシ」と
指摘されている(『遊舞集』添付メモ)。彦兵衛の没年については、
その後天野文雄氏の考証があり、『証如上人日記』の記事から
天文八(一五三九)年までは存命であつただろうとされている。

天野氏の論稿には、没年以外にも彦兵衛の事跡についての考察

がある。¹⁾

彦兵衛は桧垣本を冠して呼ばれている所から、吉野桧垣本に
本拠があつた、所謂桧垣本猿楽の出自と思われる。また、『森
田流奥義録』では桧垣本はチカイと振り仮名が打たれているが²⁾、
本書の中で、彦兵衛は自らの流儀を「千賀意流」と呼んでいる。

『四座役者目録』によれば、一団流の始祖中村七郎左衛門や、
森田流の遠祖千野与一左衛門も彦兵衛に師事し、春日流、藤田
流の祖も彦兵衛の弟子筋に習つたというから、後世まで伝わつ
た笛の流儀は皆彦兵衛の流れであり、その彦兵衛の著した伝書
中、最も奥書年の古いのが本書である。

識語によると、本書転写の経緯は、以下のようになる。

觀世座桧垣本彦四郎栄次(永正三年)——觀世座与左衛門国
広(永禄五年写、河瀬四郎左衛門宛)——小宮山李進昌世——

青木光通(明和六年写)

ここにみえる觀世座与左衛門国広（天正八年没）は著名な太鼓方であり、「四座役者目録」にも所見が多く、太鼓伝書を多くあらわした人物で、彦兵衛と同じ桧垣本姓である。また、小宮山李進昌世は、「寛政重修諸家譜」によると、正徳元（一七一二）年に家宣に拝謁し、享保六（一七二二）年から宝曆九（一七五九）年まで代官をしていたという。在任中には支配所牧場で配下に

不正を働かれたり、巡見の役人と租税の談合をしなかつた事から、「これ昌世が等閑なるがいたすところなり」とか、「其職事に意をもちひざる」と度々出仕を止められている。また、河瀬四郎左衛門、青木光通は不明の人物である。

本書の書誌については、「早稲田大学演劇博物館特別資料目録5」に記されるとおりだが、改めて記すと、以下のとくである。

235×176cmの写本。袋綴、一冊。共紙表紙。表紙に「永禄五年／龍吟秘訣全」を打付書き。内題なし。墨付37丁。料紙は楮紙。「安田文庫」の蔵印がある。

【図版はインターネット非公開】

【図版はインターネット非公開】

また、本書には錯簡があり、十九丁と二十丁が入れ替わつて
いるので、翻刻では、次に述べる『全笛集』を参考にして本来
の形に改めた。

さて、『龍吟秘訣』とほぼ同内容の書が、西尾市岩瀬文庫に、「笛
之書」の書名で所蔵されている。「笛之書」という書名は、岩
瀬文庫に入つてから付された名称で、本来の書名は「全笛集」
である（この書の影写本が東京大学史料編纂所にあるが、そこでは「令
笛集」とされている）。その書誌は以下のとおりである。

167×329cmの横本の写本。袋綴、一冊。共紙表紙。表紙左上
隅に小字で「全笛集」とある。内題なし。墨付31丁。料紙
は美濃紙。「岩瀬文庫」の蔵印がある。

この『全笛集』は、慶長二（一五九七）年牛尾惣右衛門尉の書
写になるもので、編末の識語によれば以下のような伝来が知ら
れる。

觀世座松垣本彦四郎榮次（永正三年）——觀世座与左衛門國
広（永禄五年写）——觀世座彦三郎——牛尾惣右衛門尉親頼
(慶長一年写、小幡弥兵衛死)

また、この『全笛集』には江戸後期頃の所有者によるらしい
紙片がはさまれていて、それに、「薩州住中西十郎左衛門当時

長門右衛門ト云人所持ノ本、安永十年正月廿六日、園田七五郎
殿此方持參被致事」とある。

奥書に見える觀世彦三郎は金春宗意（慶長十七年、七十五才没、
觀世宗拶の弟、太鼓は高安道善に、太鼓は国広にも師事）、牛尾惣右衛
門は慶長頃の笛役者で、この牛尾については牛尾美江氏の詳し
い考察がある。⁽⁴⁾

さて、慶長二年に牛尾から『全笛集』を相伝されている小幡
弥兵衛は『近代四座役者目録』に「今ノ虎屋長門」としてみえ
ている京都の手猿樂で、同書には、「少進ナドニモ能ヲ習。ヨ
クモナシ。サイコクノ薩摩殿ニイル。果ル」とある。この小幡
弥兵衛すなわち虎屋長門については、片桐登氏や林和利氏によ
る詳細な研究があり⁽⁵⁾、それによれば、虎屋長門は本名が小幡弥
兵衛、先祖は近江國小幡村を領していたようで、十二歳の時に
関白秀次に仕え、慶長七年に島津家久に召し抱えられ、同九年
に朝廷から長門守を受領し、寛永初年頃に姓を小幡から中西に
改め（名乗りは秀長）、慶安二（一六五〇）年に没した役者である。
また、『全笛集』にはさまれていた紙片の「中西十郎左衛門當
時長門右衛門ト云人」は小幡弥兵衛（虎屋長門）の孫にあたる長
門右衛門秀乗である。

以上を要するに、岩瀬文庫蔵『全笛集』は、慶長二年に虎屋
長門（小幡弥兵衛、のち中西秀長）が牛尾から相伝されて、中西家
に伝來した本であり、安永十（一七八一）年に園田七五郎という
人物を介して挿紙にメモを記した人物のもとにもたらされたと

いうことになる。

以上のように、『龍吟秘訣』には『全笛集』という同根の伝本が存在しているのだが、『龍吟秘訣』と『全笛集』を比べてみると、『全笛集』の方が書写年次も古く、慶長前後に活動した笛役者の書写だけあって、『龍吟秘訣』に見られる不完全な文や、笛の音高の知識のないことに由来する誤字がなく、また、『龍吟秘訣』のような錯簡もない。また、『龍吟秘訣』の「ひしき」が『全笛集』では「ひ声」とされていることも注意される。⁽⁵⁾

また、『龍吟秘訣』と『全笛集』の違いとしては、『龍吟秘訣』には、『全笛集』ない、「加」と頭についた、「観世与左衛門国広雜談にいはく」「観世与左衛門伝」という記事が、楊貴妃[10]と師子[11]の項目にあることがあげられる。たとえば師子については、太鼓の方の「追い懸ける手、追いまハす手」が、笛の「ぬくる手、おとしかくる手」に相当すること、また、「笛の長短の吹上」という、現行獅子の乱序のところの長短の旋律と推測されるものについてなど、笛と太鼓の具体的奏法について記されている。なお、「加」とされた箇所以外にも、『龍吟秘訣』には増補が施されている。

さて、『龍吟秘訣』という外題は、『全笛集』の存在からも、当初からのものではないことは明らかだが、この書名は本文[3]に、「笛は龍の吟スルこえと云説もあり」とある所から取られたと推測される。表紙に打付書で、「永禄五年 龍吟秘訣全」と国広の書写年を探つて書かれてある。横笛のことを龍吟

とか龍鳴というのは、多くの楽書に見られ、たとえば、本書の奥書年と近い永正九（一五二二）年成立豊原統秋『體源抄』にも、「笛ヲバ龍吟ト云」とある。則ち『龍吟秘訣』とは「笛の秘訣」ということであり、長承二（一一三三）年成立大神基政『龍鳴抄』と同じ趣の題の付け方であると言える。

なお、『龍吟秘訣』と他の笛伝書との関係について記しておくと、笛の稽古についての記述[2]と、笛の由来の記述[3]の部分的に重なる記述が『笛秘書集』『遊舞集』にある。⁽⁶⁾また、本書は、「笛一道においてこの書に越る書なし」と書かれているとおり、整理された構成のもとに、各曲の頭附から、舞曲の特殊奏法、笛の作法などが記されており、笛の演奏者に

【図版はインターネット非公開】

とつては、宝山に入ったような書であるだろ。中でも、別格、基本曲として『翁』と『高砂』について多く述べられているが、たとえば「高砂」の頭附を、現在の頭附と比較してみると、基本的に重なる部分があるのは、彦兵衛のあらわした本書の内容が、室町時代から現代まで受け継がれてきたことを物語っている。

(6) [25] に「ひ声と云事」という一文があり、そこではひ声とひきは同じこととされている。一方『遊舞集』『笛秘書集』では、「笛の手に、大ひしき、小ひしき、かんのひしき、ひ声、息さき、かすり、のたれ、…」とあって、そこでは別の手とされている。

(7) 龍、鳳凰などになぞらえた笛の由来は、「呂氏春秋」「文選」「風俗通」等から、樂書『龍鳴抄』『教訓抄』『續教訓抄』『體源抄』等に取り入れられて、それが多くの笛の伝書に微妙に変化して記されている。

(8) 狩野良寛『教訓抄』八に、「一、横笛 又羌笛云。龍吟云。龍鳴云。

漢ノ武帝ノ時。丘仲所造也。(中略)昔龍ノナキテ。海ニ入ニシヲ」とあり。

(1) 天野文雄「観世方笛之次第」(『能楽研究』第八号、一九八三)。

(2) 森田光春「森田流奥義録」(能楽書林、一九八〇)。

(3) 「龍吟秘訣」では、「18ウ—20オ」・「20ウ—19オ」・「19ウ—21オ」

となつてゐる。

(4) 牛尾美江「牛尾玄笛と牛尾藤八」(『能楽研究』第七号)。牛尾惣衛門が誰であったのかは、牛尾玄笛の弟子で、一時宗意の養子だった牛尾藤八がともされるが、結論は出されていない。また同稿では惣衛門と小幡の具体的な関係についても書かれている。

(5) 片桐登「手猿樂『虎屋』考——四座役者目録」注——(一九一)[宝生 昭和四十七年一月～昭和四十七年五月]。

林和利「能・狂言の生成と展開に関する研究」(平成十五年、世界思想社)。

(10) [3] の「夫呂律のおこりと云ハ」とへくとんさうより出たる

注

永禄五年

龍吟秘訣 全

慶長二年

全笛集

なり」は、『笛秘書集』『遊舞集』に「音律のおこりへ、悉曇藏より出たるなり」とあり、また、「ぼうたう和尚」は「道中和尚」、「笛はざうのきは也」は「其笛の像第一也」とある。

〔図は一調今に已上に在之云々〕のところに、「龍吟秘訣」も「全

笛集」も記述に対応する図がないが、『笛秘書集』『遊舞集』『双笛抄』『能笛秘伝』など他の笛伝書には笛と十二律の図がある。

〔1〕「全笛集」にはこの文はない。文意からも永禄五年の国広から河瀬への伝書授受時に加えられたとも推測される。

『龍吟秘訣』 翻刻

凡例

一、翻刻は原文に忠実であることを基本とした。

一、読みやすさを考慮して、適宜句読点を施し、引用されている

謡の詞章は「」で囲んだ。

一、漢字は基本的に新字体を用いた。

一、翻刻は原文に忠実であることなどを基本とした。
一、読みやすさを考慮して、適宜句読点を施し、引用されている
謡の詞章は「」で囲んだ。

一、意味がわかりにくい箇所には、適當な漢字を（）に入れて
傍記した。明らかな誤写と認められる箇所は「（ママ）」と傍
記した。
一、基本的に一つ書の項目ごとに通し番号を付した。
一、曲名に付された鉤印、文章冒頭の○、△印（少数）、単語間の
（いづれも朱）印等は省略した。ただし〔6〕の弧（朱）はそ
のまま付した。
一、『全笛集』との異同を下段に記した。

笛一道におゐてハ此書に越る書なし。至極の秘書也。努力妄ニすへからず。笛を不吹ともケ様の秘書は大切にすべき事也。〔1〕

1 底本は表紙見返
　　の書き込み。
　　この三行「全
　　笛集」にナシ。

凡笛稽古の様、曾而初心の時吹はしむるは、先いき、同手のすこしあかるをもおほへたらん時より、いかにもふとき笛にて吹へし。

2 先いき—いき

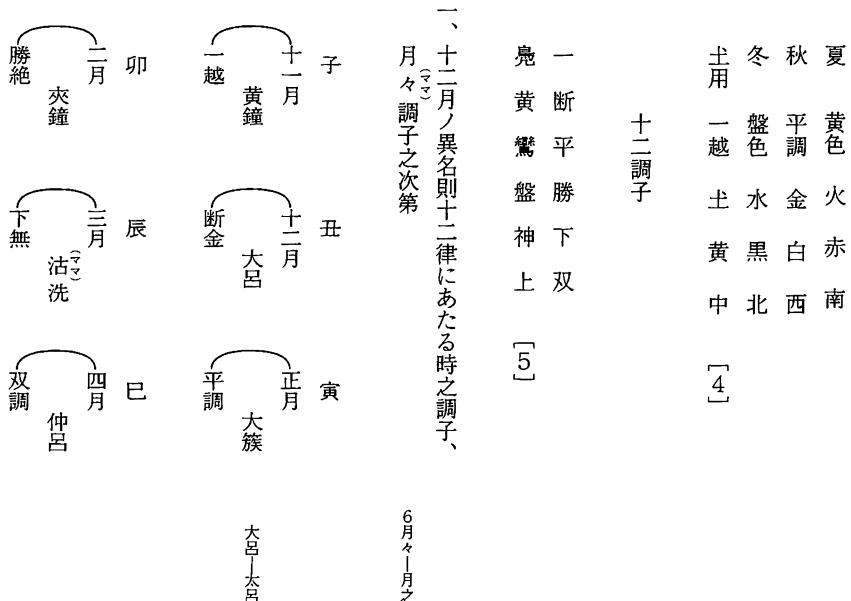
いきもおとなしく出て、手なども自由に心得たらむ時より、なりかゝりをもなおし、主のきこんにかなひたる笛をもつて吹へし。扱心も手もるつうの時よりは、すこしいきよりほそき笛にて吹物ニ候。常にひ、きのなき所にて、響を吹出す程可吹事ニ候。ひ、きの有所にて稽古すれば、おのか音にまよひて、おのつから笛もよへくおもしろくなによつて、是を嫌ふ事のあひかまへて、けいこに神変ハある事ニ候。〔2〕

扱心も手もるつ
　　うの時よりは—
　　さで心もおとな
　　しくなり、手も
　　御通の時よりは

夫呂律のおこりと云は「こと／＼とんさう」と云ふ事の「こと／＼とんさう」より出たるなり。かんのしよに曰ク、

の帝のはしめなり。皇帝の御時十二律をつくり、上の六呂を陽になそらへ、下の六律を陰に用てほうわうしきをうの声にたくへてきりだる也。又笛ハ龍の吟するこえと云説も有。横笛共和国江渡る事は、ほうたう和尚より。慈覚大師の御相伝有し也。笛はざうのきは也。図は一越調、今に山上に在之云々。穴を七ツに定る事、七星をへうせり以上九ツの穴より声を出す事、九曜をへうせり。五調子といつは、地水火風空也。陰陽と云ハ、萬のすむ物は上で天となつて陽氣をくだし、にこる物はミなど、まつて陰氣を請。呂といふは陽気を下、律は陰気をうくる。かるかゆへに陰陽和合する声を出す。仍能乱舞、笛より初而笛にておさむるいつれの道愚かならすといへとも、分而稽古たしなみの上よりおのれと音しほなど面白く成へき也。

3. こえ一音
和国斗一和国に
慈覚大師の御相伝
—慈覚大師御相伝
山十已上
云々ナシ
以上九ツの穴—
前後九の穴





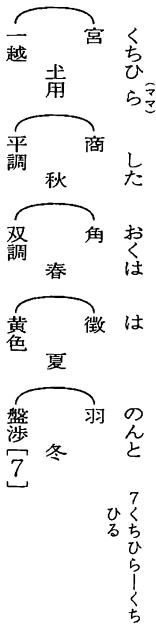
或一夷

或則

或夷



[6]



[7]

五音
祝言 幽玄 恋暮 哀傷 蘭曲 [8]

一、拾鉢と云事。心持十有事お云。おくにしるす。十鉢のすかた和歌にしてるハ別也。それハ花伝抄に在之。[9]

一、人前にて笛吹候時、双調にも黄鐘にも定たる手あり。後ハなにとも候へ、最初に入事

⁹ 心持十有事お云
¹⁰ 心持の十有事
云
抄に在之。花伝抄に可有之
それは花伝抄に在之。其ハ花伝

一、勧進能の次第。洛中は三日、洛外は四日也。
初日。五いきに吹。のたりの数よせてまで
五ツなり。

同。翁之舞の吹出定也。吹とめ各別なり。
信の吹、可秘々々。

二日。三いきめに少略する様有。

同。翁之舞の吹出、初日と各別。かんの穴
より吹出。

三日。初いきに略して吹様也。

同。翁之舞の吹出。かんこの二ツより吹出。

四日。有時はひしく也。せんさいふより初る。

同。翁之舞は初日へかへる。[11]

一、翁之笛之事。座付のひしき過てやかて高音
に吹。りよにとめて、「百々たらに」とうた
ひ出す様に可有之。是ははくのだらにと云。

[12]

一、「さいはひ心にまかせたり。と、」と云所に
呂を吹て、「ぢりやたらり／＼ら」と云て軽
而ひしきを吹。[13]

一、千さいふのうちの事。

二度舞あり。前ハ高音より吹て、ゆりをさ
うに五ツ吹。後の舞は一後の

11 洛中は三日、洛
外は四日也。洛
中三日洛外四日
なり

信の吹→信の吹様
なり

12 ひしき→ひ声
高音に吹→高音
に吹きそらして
たらに→たら
り

13 と、一百々
ひしき→ひ声

14 ゆりをそうに五
ツ吹→ゆりを五
ツ吹

舞

めてひしきを吹て、やかて信の呂を吹うち
より、「あけまきや」と謡出す様に。地取あり。

ひしき—ひ声

一、「座してゐたれともまいらふ」と云「ま」の
字より、呂にてゆりあくる。「15」

一、「千はやふる神のひこさの昔より、久しがれ
とそいハひ、そよやりちや」と云「り」の
字より、呂にてゆりあくる。「16」

一、「今日の御祈祷なり、ありハらや、なしよの
翁とも」云、「ありはら」の「あ」の字より
信の呂を吹て末を手色に吹納る。口伝有。
〔17〕

一、「そやいつくの翁とも」と云て笛一段習有。
心をすまして信に六の下を吹。爰をせいかい

はの段と云説有二付而、左衛門尉二尋申処

二、た、六の下と云へきよし候つる。「18」

一、「そよや」と云て小つ、ミの頭を打て、纏而
吹出す手くたり、合にいふかことく定儀有。
序に急の事、舞台さき迄を序にする。其よ
り袖をかへすまでを破と心得候。袖をかへ
してより急につめたるかよく候。吹とめの
事。舞とめとひとしく吹合物二候。然共舞
のゆうによつて舞はあまりて笛吹イテ候へ
ゆうに—ゅうな

は、吹次様あり。是を覺悟候へは、不苦候。
それをならハすしてはやく吹はて候ハ、
最笛の越度たるへし。「19」

一、「そよや」と云うち、むそくの段と云也。
〔20〕

一、翁のかへるまくのきハにて色ゆる手あり。

跡をいはふと云ゑん也。初日迄の事なり。

此跡を祝と云に二つの義あり。一二ハ、勸

進能を能四日有るへき、跡三日の能をかへたるによつて、あとを祝ふと云義有。又

一ツハ、翁の入はハ其日一日の能のはしめ

の入はなれハ、跡を祝と云儀も有。惡事さ

いなんなき祈祷となる。去によつて笛もい

つれも地しみのなき様に芸をする物に候。是

を翁端ノ笛と云也。「21」

一、さんはさの笛之事。

ひしきより纏而高ねに吹みたして、大つ、
ミのかしらをた、むうちにひとつと吹てか
る。爰に上古當世の習有。「22」

一、鈴之段之事。鈴を請取て、舞台さきへ行迄
平調かへしを吹て、ひとつ吹て、おなし手
を三返吹て、やかておろす也。おろしは三
度可吹。舞とめの事。前の吹出しのことく

吹イテ候へは—
吹果候へハ

吹はて候ハ、—
吹はて候時ハ

まくのきハ—迄
路

其日一日—其一

21 まくのきハ—迄
路

22 ひしき—ひ声

祈祷となる—祈

勸進能を能四日

有るへき—ナシ

其日一日—其一

23 おろしは三度可

吹—ナシ

ひつと吹て、おなし手を五返吹てとむる。

是本也。但舞手による事なれば、不可有油

断事也。ひしき信に吹。右是を式三番之習

と云也。仮初にも外見有へからすと云々。

[23]

一、翁なしの座付と云事有。貴人外仁杯の俄に

被仰付御能などに、翁なくして能有之。其

時の座付也。[24]

一、ひ声と云事。日吉と吹子細也。ひしきとよ

む也。ひ声と可云能ハ習在之。[25]

一、脇能置鼓之笛之事、第一秘事也。先信の呂

を吹て、小鼓と心を合せて、いかにもたく

ましく本の音取を吹事ニ候。色々のゆび有

へからす。色えの指とハおどる指の事也。

脇能にかきりたる笛の習也。吹とめ余の音

取に各別。[26]

一、同。ゆりのなき音とりあり。是は略儀たり

といへとも、四日など有へきうちにハ、一日の脇の能に可在之。[27]

一、かいこの笛之事。習有。但こしつ肝要ニ候。

笛手くたりを覚たるハかりにても成へから

す。小つ、ミとこゝろを合せて、脇はしか、

りより舞台さきへ行て、小つ、ミ打上ケ候

迄に、吹もまさす、たりもせぬやうに吹

合る物ニテ、脇へもよく相尋候ハん事專一

也。是ハ習外の分別也。[28]

一、能の吹様と云は、高砂にきハまる事ニテ、

此一番の吹様にて萬の能の吹様ハ究事ニ候。

[29]

一、次第の笛高音より吹出す也。手くたり定と

いへとも、をそくなく出候ハ、末ハ吹次

候ても不苦候。[30]

一、「今お始めの旅衣、～、日も行末えそ久しき」、呂を吹てのらする。[31]

一、「旅衣、末はる／＼の都路を」と云て大鼓打

返すうち、かん。[32]

一、「いくかきぬらん跡末も」と云所にて中のを

吹。是より末のくたりを吹かけて、謡過て

せりふになる迄ゆう／＼と吹とむる也。扱

ひしき也。是お惣別謡の一くたりの吹様と

云也。[33]

一、せいの笛之事。手くたり定る也。吹出か

んの穴より。一声のうち、なかしにてもこ

しにものうち笛あるへからす。[34]

一、「尾上の鐘もひゝく也」と云所、下無。[35]

一、「をとこそしほのミちひなれ」と云所、大鼓

吹合る物ニテー

吹物に候
脇へもよく相尋

候ハん事專一也

一ナシ

はハ習外—是習

能の吹様と云は

ひしき信に吹—

ひ声あり
と云々—云々

24能有之。其時の
一能在之時の

25ひしきとよむ也。
ひ声と可云能ハ
習在也。一可秘。

26第一秘事也—ナ
シ

27呂を吹いて呂
を吹きてさて

28脇能にかきりた
る笛の習也。一
脇能の笛也
かきりたる事候

29能の吹様と云は
一脇能と云は
吹様ハ—吹様

30吹出す也。手く
たり一吹出す手
くたり

31出候ハ、一出候
へハ

32〔31〕ナシ

33中の中のかん
末のくたり一末
の手くたり

34こしにてものう
ち一こしのうち

35せりふ一しらこ

36ひしき—ひ声

37

38

39

40

41

42

43

こいかけてかしらをうち候内に、下無調よ

り吹上てかしらうち返して、太夫さしこと

謡迄に、呂お吹とむる様に有へし。〔36〕

一、「心をともとすかむしろの」と云より、「お

とつれハ」と謡迄に呂お吹出して、大鼓う

ち返す所迄に吹とめ候様に可有之。〔37〕

一、「所は高砂の」、つ、ミ打返えす内、かん。

〔38〕

一、「命ながらへて」、中のかん。それより六の

下を吹て、「それも久しき名所かな、／＼」、

脇大臣立迄に吹きとめ候様ニ可吹。〔39〕

一、「四海波しつかにて」と云所に笛有へからず。〔40〕

一、「松こそめてたかりけれ」と云所に、中のか

んおいかにもにきやかに吹、それより其次

を吹かけて、「君の恵そ有かたき」と謡迄に

吹とめ候様ニ。〔41〕

一、「くり上の笛之事。『南枝花始て開』と謡間の

笛也。ゆりの数七ツ也。「然に此松ハ」と謡

出す所吟声通る様に。〔42〕

一、「いきとしいける物ことに、敷島の陰による

とかや」、「いきとし」のあたりよりさうの

六の下を吹て、曲舞へ調子のよく渡る様ニ

可吹也。〔43〕

一、曲舞上ぬ間はそゝと吹あけてより後、「霜は

おけとも」と云あたりよりゆう／＼と高音

を吹出て、次のくたりを句あひ／＼に可吹。

〔44〕

一、「けに名をえたる松かえの」、中。〔45〕

一、「住吉に先行て」と云より、高ね。

「沖の方へ出にけり」と謡所を吹あまして、

太夫かく屋へ入間のさめぬ様に吹也。〔46〕

一、あいをゆう／＼可申果時分より呂を吹、さて、

あいはてゝ、立あかり候様ニ吹とめ候。〔47〕

一、「ほをあけて」、鼓打返す内、かん。〔48〕

一、「はや住の江に着にけり」、日吉。〔49〕

一、後の出はの笛之事。前の一声の笛に重而か

んを吹きそらして、いかにもはらりと心を

うき立て、にき／＼敷吹也。〔50〕

一、「夜るの鼓の拍子を揃へてす、しめ玉へ宮つ

子たち」、爰にて応の声あり。習。〔51〕

一、「三月の雪衣におつ」、舞の吹出等定たる習あ

り。同初段のおろし、是又定たる儀なり。惣

而笛になまりたる事を嫌ふといへとも、なま

るほとつよくふくへきは脇能也。いきをたふ

43吹也—可吹也

44曲舞—曲舞の

可吹—可吹なり

36太夫さしこと—
さしこと
大夫身かへして、

37と云より—と謡
より

45中—かん

46太夫—大夫

47ゆう／＼—やう

48高音之事—ナシ

49日吉—ひ声

50笛に重而一笛重

51宮つ子たち—宮

52なまりたる—な

53つたら

54そらし

55おへ

56おへ

57おへ

58おへ

59おへ

60おへ

61おへ

39それより六の下を吹く、「それも久しき名所かな、／＼」、「そ

れも久しき名所かな、／＼」、「それも久しき名所かな、／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「それも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

39それより六の下を吹く、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それも／＼」、「そ

れも／＼」、「それ

／とあまして、後つよに可吹。[52]

一、「千秋樂ハ民おなて」と謡よりはつる迄、いかにもゆう／＼と下無調より吹上てひしき也。

右是を惣而能之吹様と云也。此外は有へからす。但取入たる習口伝の有事をハ皆是より奥にしるす。極意之秘説不遇之。[53]

一、老松 序 信 [54]

一、白楽天 破 草 [55]

一、放生川 急 草

〔55〕

右此三番を信の序と云。手のくたり定たる

也。太鼓の頭の数定也。但静舞などにては、五くさりめを二いきぬいて吹也。是習也。

太鼓の数もそれについたかふへし。此三番に

大和かゝりと京かゝりと相違有。京にハ老

松、白楽天、放生川とを序破急と定候。大

和かゝりハ白楽天、老松、放生川と申候。

位如此。兩座の分別有儀也。但放生川にハ

序の内のおろし不有之と云々。[56]

一、伏見。信之序に昔ハ吹候事有。今ハ常の神舞也。[57]

一、志賀。神舞。陽神。位高砂同前也。[58]

一、難波。前は天女之舞、後は勧之舞也。[59]

一、修羅にハ舞なき物也。されども草薙教盛ハ、

「拍子を揃へ声を上け」と謡に依て序の破と吹。あつ盛は笛の沙汰在之能なれハ、其か

んなくしてハ不可叶事也。「あの上野にあたつて笛の音の聞へ候」といはするやうに可有之。

「笛の音の聞へ候」といはするやうに可有之。

「草刈りの吹笛ならハ是も名は青葉の笛とおぼし召せ」と謡内に、佛といふ吹様有。

〔60〕

一、清経ハ別而習有。「ねられぬにかたふくる、枕や恋をしらすらん」と謡てなになしに太

夫すこ／＼と出る。「聖人に夢なし」といひ

出す間の笛之事。習又分別有。か様の所を無文の能の習といふ。[61]

一、こしよりやうてうぬきいたし、音もすみや

かに吹ならし」と謡所、是もすミ渡りたる

吹様也。下無調より吹上るやうに吹也。[62]

一、後のはたらきの事。八島などにハ大きに替

へき也。八島は「又修羅道の時の声」といふてより氣をかへていさむ心を持、清経は、

「うき音にしつむなミたの雨の恨めしかりけ

60 一、「二」ナシ
序の破と吹—破
とハ吹

あつ盛は一惣
てあつもりハ

61 清経ハ—清経な
とも
ねられぬに—
ねられぬに

枕や恋をしらす
らん／＼

しらすらん／＼

いひ出す—謡出
す

吹様也—様なり

吹上る—ゆりあ
くる

62 吹様也—様なり

63 八島は—ナシ

きをよハくせんこそ口おしき事成へけれ。

〔65〕

一、定家。あひのうたひ「草のかけなる露の身」

と謡處、一日ひやうしとなり、高ねを吹て、

次を「弔ふゑんは有難や」とうたふても笛
を吹あまして、「夢かとよ」謡出す吟声通つ
るやうに、呂よりわたすへし。此等を習の
極意とす。此序名のある舞也。信の序にて

もなく、又常の序にても有へからす。日ひ
やうしを離るゝと云事、此舞の内にきわま
る也。〔66〕

一、夕兒。序の破、吹とめ呂にどむる。〔67〕

一、朝兒。序の舞、かんより吹出す。〔68〕

一、誓願寺。序の舞、心持専なる能。殊勝にして、
さすがきやしやなるかたを本とする也。〔69〕

一、羽衣。うき／＼としたる序の舞也。

物着あり。後のはたらきの舞、少ひきたて、
よきなり。〔70〕

一、当麻。「花ぶりいきやうくんし」と云あたり
より、ゆう／＼と中のかんへ吹そらして、
太夫かくやへ入迄に吹とめ候様ニ。はのま
い也。いかにもさしはつてつよし。〔71〕

一、百万。「比目の枕しき波の、哀はかなき」と

云所、昔より沙汰有。おとしかくる色えと
云手有。〔72〕

口おしき事成へ
けれどもおしけ

一、杜若。いかにもすくひ立てかろき舞也。少

もしつまぬ能也。草の物着あり。観世方ハ

白はやし也。秘事。〔73〕

一、小塩。序之舞、静にかるく、いかにもしん
しやうにほけ／＼と吹。〔74〕

一、邯鄲。「玉のみこしにのりの道」と云所を、
かんをにきやかに吹そらして、「上人と成そ

ふしきなる」と云てらんしやうなり。こ、
いいかにもいそきて出る所なり。樂の事別
而習有。夢の内の舞とて、吹出余の能に各
別なり。台よりおりてより少をしたて、
次第につむる也。黄鐘たるへし。若急ニな
つてハ、盤渉へうつしなどしても不苦候。

但つき能杯に在之ハ、てうし其まゝたるへ
し。〔75〕

一、富士太鼓。「今は歎くに其甲斐もなき跡に残
る思ひ子を」と云所、うれへの手を吹下して、
ゆりあけて末をぶきつくへし。樂の事。是
又余の能に各別せり。哀傷の樂是也。黄色
の時は定たる手色あり。大略盤渉可然候。

沙汰有—沙汰有
也

72 沙汰有—沙汰有
也

73 草の物着あり。
観世方は白はや
し也。秘事—ナ

74 シ
かるく、一かろ
し

75 のらんしやう—草
のらんしやう
別而一分間
余の能に各別
り一余能に各別
せり

つき—ナン

吹出し定なり。習有。[76]

習有—ナシ

一、とをる。

一、唐船。樂、船中にての事なれば、余の能二

ひきかへて、からくうぎ／＼と可吹。惣而

樂ハしつかに有物なれとも、此能は帰國を

悦と、又しつむ事をいむによつて、うきや

かによく乗心持よく候。[77]

一、関寺小町。京かゝりハ、「百とせは」と謡て

より呂_{下無調}より色えて舞にかかる。からひてき

やしやに吹。大事の習有之。[78]

一、通小町。「なミたの雨か」と云てはたらく也。

「あらくらの夜や」と云所の色えなれば、い

かにもしつかに吹あくる也。盤渉に夜るの

遠音と云手有。[79]

一、卒都波小町。「しやうゑの榜かいとつて」、

是ハ吹出しに習有。すくひあくるゆりと云

色えなり。猶可尋之。[80]

一、道成寺。乱拍子の笛之事。是定たる習有。

各別の呂有。吹出之事。控の段より小つ、

ミ打入て、かしらをうちもとの地へなし

て、太夫「みちなりのきやう」と謡出まへ

に吹とめて、呂の吟声の通するやうに可吹。

舞ハはのは也。いかにもからく／＼と吹重也。口伝有。[81]

77此能は帰國を悦
と一此一番は帰
國悦と

よく乗心持よく
候—乗かよく候

78下無調—ナシ

大事の習有之—

ナシ

79はたらく也—は
たらき

と云所の色えな
れば—と云出色
えなれハ

80卒都波—そとハ

ゆり—ナシ

81もとの—又もと

太夫—大夫

82尺當作^{ハシマツ}—ナ
シ

83松山鏡—松乃鏡

84と云所^ダ—と云

下無調—

85所にて一所

86恋乃音取を吹也

—恋乃音取

87此三番ハ—此三

番^ハいづれにも—
つれも

可渡候也—可渡

一、とをる。

「あら昔恋しや」と云所、恋乃音取を吹下

して、ゆりあくる手を吹也。舞はは也。

きうの急也。又尺_{凡古竹筋}乃舞と云事有。昔ハ一廻

候間しらはたらきにして、太夫勧を見て舞

にかゝると申候。今程はいか。但太夫を

能可見事專一也。[82]

一、松山鏡。「父は泪にかき暮て」と云所、うれ

への手を吹。はや笛。[83]

一、鞍馬天狗。「花そ知るへなる、こなたへ」と

云所ら、下無調より吹上ル。速笛。勧ハ舞也。

常のはやき舞の様に候へは、太夫のさばき

ならぬよし。いかにも吹きみたしてハラリ

と吹。[84]

一、愛染川。「あいそめ川に身をなくる」といふ

云所にて、うれへの手を吹也。[85]

一、常陸帶。「契りかけたりや、かまひて守り玉

へや」、恋乃音取を吹也。[86]

一、二人静、吉野静、紅葉狩。

此三番ハ陰に謡どむる能なれば、呂より吹

上る。か様の事いつれにも可渡候也。又陽

に謡留る能は高音より吹出。陰にても陽に

てもなく、中に謡どむる能有。たとへは、

82尺當作^{ハシマツ}—ナ
シ

83松山鏡—松乃鏡

84と云所^ダ—と云

85所にて一所

86恋乃音取を吹也

—恋乃音取

87此三番ハ—此三

番^ハいづれにも—
つれも

可渡候也—可渡

千寿重衡、「忘めや」など謡とむるやうなる能おは、下無調より高ねへ吹わたす。是等の事一段秘する事に候。〔87〕

一、盛久、春栄、御前鉢木、七騎落等の男舞之事、何も同位たるへし。第一、男舞ハつよく少もたるまぬやうに可吹也。〔88〕

一、是戒、大會等の早笛、何もしつかにいかにもよくのりて吹事候。〔89〕

一、張良、昭君、鶉飼等の早笛ハいかにも急に吹。

ま」とのはや笛成へし。惣而鬼の能に二ツの名あり。りきとう、さいとうと云。りき

とうハいかにも力を入て静成はや笛也。さ

いとうと云はかるくはやし、おもてお云時ハ、大へしミを力とうといひ、とびておさ

いとうと云也。是あうんの二ツ也。是お分

別れハ速笛之位ハ究者也。〔90〕

一、錦木、松虫等の黒かしらの能は、うき／＼として、ふミニとめぬはやし也。吹出しが相違せり。〔91〕

一、西行桜、遊行柳。何も序之舞也。

老木の花のせい、朽木の柳のせいなれは、女の序杯に吹は不似合候。少からひてほけ／＼と可吹也。〔92〕

一、海人。出羽の笛たくましくふき、「あら有難

京かゝりハ、経を大臣に渡スを見て舞にかかる。大和かゝりハ、経を渡して仕手柱のき

ハ迄立退、大臣をつく／＼見てなくを見かけてる舞にかかる。然れ共時による事なれ

ハ、專に仕手を見るべき也。〔93〕

一、遊屋。文の末に「ふること迄も思ひ出の、なミた」と云所りよを吹。「よしやよしなき世のならひ」と云所、中よりおとしかくる手を吹。本のぐりあけにてハあるへからず。

舞の事。京かゝりハ、「ふかま情を人やしる」と云内より吹出して、色えて舞にかかる。

大和かゝりハ、「なにと舞おまへと候哉、中

／＼の事」としたへて、大つ、ミかしらをうけてはにかる。両座の相違是也。「ちる

ハ泪が」、爰の色え短冊之段迄の笛吹合大事

也。縦いか様に吹つき候共、けんかくになき様に、つきめ見へぬやうに吹事かん用也。

このへて一うた

大つ、ミかしら

大鼓の頭泪が一涙の川や

らん笛吹合一笛の吹

合つきめのみえぬ

92 遊行柳。何も—
朽木の柳のせい
ナシ

吹は—吹も

93 遊行柳。何も—
朽木の柳のせい
ナシ

吹は—吹も

93 海人—海士

見て舞にかかる
又
一みでかゝり候
仕手柱のきハ迄
立退一廻して、
して柱の入際にて

94 遊屋—遊や
云—謡

信の神樂也。七五三のゆりと云事、序の内にあり。秘する事也。七五三と書て幣とよむ也。七とハ天神七代をへうせり。五とハ、

地神五代と云儀也。三とハ、天地人の三さないと云儀也。是を吹事ニ候。さいとハまつりこと、よむよし也。おろそかに思ふへからす。又三輪と杜若、この一番京かゝりに白はやしと云事あり。三輪ハ信、杜若是草也。

笛、三輪に定たる吹様あり。式段ゆりと云事有。一段秘事也。但自然笛の手下り習覚たりとて、仮初にも詞に云出す事なけれ。

諸道名を得たる衆參会の時も白はやしと云事無之儀也。まして其外の事ハ中々。神樂ハ扇をひらきてより舞に吹。〔95〕

一、立田。おなし神樂なれとも、少の草の心持有。三輪ハからひて殊勝二、立田ハうつくしく吹、ごへいを捨てより舞に吹。〔96〕一、あたか。ゆう僧乃舞なれば、いかにもつよく可吹也。當時おとこ舞のことく吹出候事、以外のあやまり也。〔97〕

一、小督。「さゝそ心もすミ渡る」など、云所、

景氣のおもしろきやうにゆう／＼とかんより吹候てよく候。舞の事。是も男舞の様に

95 信の神樂也—信の神樂はなり

七五三と書て—

三さいと云儀也。是を吹事ニ候—

三さいと言儀を似、是を吹事ニ候—

笛三輪に一笛の下り三輪に覺た

りとて一覺たる詞に一詞にも

衆者

程に、是成海士の塩やに立越一夜をあかさはやと思ひ候」と云時、ひしき候。小鼓より打出すも有。一声のうちいかにもしめやかに可吹。「よせてハかへるかたほなミ」と云所より、かんの指より吹返して、「あしへの田鶴こそハたちさハけ、四方の嵐も音そへて」と謡迄に吹候はて不叶手くたり也。秘事。

しんの物着はほのかに吹出。あいしやうの物着とも云。三重の心持あるにより、物着之段と云。口伝有。

舞之事。「立わかれ」と云うより中の指より吹出。後の勵之舞、おろしあるへからす。但余の能と不混、松に執心して太夫えたにたハふれゆうをする見かけてより、少吹そらして吹手あり。さりながら座敷などにてハ、人の耳に立事なれハ無用に候。ひとつ吹とむる。〔99〕

一、楊貴妃。「哀こてうの舞ならん」、そのはたらき松風の舞の吹出と同前。序之舞也。い

吹す候。高ねよりはにかゝる、うきたちてきやしやなる舞也。可有分別候。〔98〕

一、松風村雨。「あの山本の里までハほど遠く候

かゝる、一大家かふりにてまぶなれハ、高音よりはにかゝる

99 塩やに一塩にひしき候—ひ声を吹打出すも有一打

物着—物着也。

物着は物着也。

シ 下無調之事—ナ

シ 下無調之事—ナ

能と不混—能に不混

松に執心して太夫えたにたはふれゆうをする—松の枝にたはふれ大夫ゆうをするを

座敷—常の座敷

段を舞にして、中三段をみたれとす。上古

ハ前に舞を吹ぬれハ、乱のまゝにて果候。

今ハ右の分ニ候。惣而此能は草のはやし也。

ゆめ／＼信におもふへからす。ミたれを秘

するによつて、人毎に信の能と思ひ候。信

に心得ぬれハ、曾而ならぬはやし也。〔11〕

一、師子。石橋、望月、式番師子也。但望月

はさうのはやし也。

「今いく程によも過し」と云てらんしやうを

吹。師子にかかる所に習あり。りよりか、

る切拍子と云事、笛の心得の肝要也。吹上

之事、あまねく人に許す事なし。笛より吹

上の手を聞いて太鼓打人物に候間、慥に相届

候様ニ可吹事專ニ候。返々師子の事、拍子

の外の物ニ候。はやきを手柄と思ひても、

のり候ハねハ、曲なき物ニ候。ぬくる手、

おとしかくる手とて二ツの大事あり。〔12〕

△加 観世与左衛門伝。追懸る手、追まハす手。

此二ツ太鼓ニ有。笛ニ相当。又長短の吹上

可秘云々。〔13〕

前にもしるし申ことく君臣の位と申事專ニ

候。太鼓を正にはやす能も有。

111 舞を吹ぬれハー
舞なれば

右の分ニ候—右

草のはやし—草

の能

はやし也—はや

しにて候

112 望月、式番師子

うのはやし也—

ナシ

吹—吹て

あまねく—當流

よりあまねく

吹上る手を聞いて

—吹上るを聞いて

打入—打こむ

ぬくる手—一、

〔13〕 ナシ

神楽、かく、ミたれ、獅子などハ、笛君の

位にして、残る役者はミな臣下と成なれハ、

す役者なれハ、太夫を專ニすへき事不珍義

也。有文無文と云ハ、其能のうちの諸道の

中に、なに、てもめづらしき事の有を有文

の能と申候。無文の能とハ、謡にもはやし

にもきとくなる事ハなくして、さすかゆへ

ある能有事候。それを無文の能と云。是仕

手の大事にする事也。上手の手からといふ

はこれ也。〔14〕

一、心のつめひらきと云事。たとへは其能にハ

なにをおもてにあて、出るそと思ふに、俄

に引かへて別のおもてなどにて出る時ハ分

別して、さする人の耳に立候ハぬやうに位

をかゆる事ニ候。〔15〕

一、時によりうきやかにはやし候ハて不叶能と

おもへとも、しつミはて、うきあからざる

時ハ、三段四段めなどに可吹急なるおろし

を初段式段に引上で吹候事ニ候。また一か

とおしつめて可吹。はやしさきたつ時は、

いかにもしつかなるおろしを吹かけて心に

てしめ候事ニ候。〔16〕

太鼓を正にはや
す能も有—太鼓

を正にはやす能
も有—大つ、ミ
小つ、ミを正に
するもあり

獅子—師子

位にて一位にし

てはやす事ニ候

太夫—大夫

中になに、ても
めづらしき事の

有—中なに、で
も珍敷事有

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

太鼓を正にはや
す能も有—太鼓

を正にはやす能
も有—大つ、ミ
小つ、ミを正に
するもあり

獅子—師子

位にて一位にし

てはやす事ニ候

太夫—大夫

中になに、ても
めづらしき事の

有—中なに、で
も珍敷事有

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

と申候—とても

てはやす事ニ候

能有事候。それ

を—能などを

一、能壱番の間ハそとも笛をはなすへからず。

殊更京かゝりハ、兼而定もなき所にてしほ、

えつれは勧事あり。心懸る其謡のえんに似

合候様に可吹事、肝要候。眞実か様の事、

習の外ニ候。〔11〕

一、勧進能などの時、四五番目などにハ、芝ゐ

もさハかしく、調子などくるひ候時ハ、う

たひのうちをめらして吹物ニ候。さ様に候

得ハ、うたふ衆も調子かるそと意得て、次

第にめらしてうたふ物也。さてまひになる

時はつしと吹候へは、おのか心もくらきよ

りあかりへ出たるやうにおもはるゝ也。諸

人も一かと有やうにおもふ物也。又勧進能

などの心持ハ、大かたにする芸はうつもる、

物也。いかにも氣をはつて、うきたつ心を

持也。氣のしつむ時は、則する役の音迄あ

しききこゆる物也。一切は氣遣にて候。

〔18〕

一、舞のおろしなども、太夫いかにもゆうく

と立、やすらふ時は、一かとあるなかきお

ろしお吹。またすら／＼とひきたてゝ行時

は、かろき手を吹事に候。〔19〕

一、座敷乱舞杯に我程の役者餘多有へき時は、

117 はなすへからず
一はなさす

所にて一所に

心懸る—心かけ

て

余の笛なか／＼しく序を吹たる跡に可吹時は、引かへてミしかく吹。りよよりかゝりたらハ、高ねよりかゝりなどするやうに有へし。但其座に上手あつて吹たる跡に可吹時は、いかにもろくに、おろし杯もつねに有事を吹物ニ候。少も耳に立事をすれば、上手に近(マツ)しやう心ちして片腹いたくおもはる、物ニ候。〔20〕

一、或ハ外人、貴人又ハ児若衆の、つゝミ、太鼓杯を被遊、其御相手にならハ、いかにも

すくなる手を吹、地などおもろくに吹物ニ

候。色々の手を六かしく吹かけなどする事、

慮外の一ニ候。但たとひ貴人外人成とも上

手杯にて、それをけうにある乱舞の時は、

一かと有へし。〔21〕

一、余の人盤渉などにて吹たる跡に可吹時は、

双調をそと吹て、さて黄鐘を吹へし。是ハ

盤渉を吹て人にわたさハ、やかて黄色を卒

度吹てをく物ニ候。是氣遣之一ニ候。〔22〕

一、座敷の大小により氣遣肝要に候。ひろき座

敷杯にてハ、はやしの位より少引たてゝ、

118 あかりへーあか
りに
おもふ物也—お
もふなり

シ

119 すら／＼とーナ

120役者一役

121 心ち一心持
たつ手
ミー御つ
ミ、御つ
其御相手—御相
手
けうにある乱舞
の時は一興など
に入時ハ

122 跡に一跡にて

123 氣遣一氣械

音をも力を入れて可吹事ニ候。又六帖敷四帖

舞の一乱舞な

音をも力を入て可吹事ニ候。又六帖敷四帖半などにての乱舞の時ハ、双調成共黄鐘成とも、いかにも音おうつくしく、手色を專ニ可吹事に候。先人の所望の時は双調を吹て、舞の一、二ツほども同調子にてよかるへく候。さて本調子になるとても、少めり候様に吹事、小座敷杯にてのこしつにて候。

123

其座に尺八吹などのあらハ調子をかゝへて吹物に候。いきおはかりに吹事、口惜事

たるへく候。笛吹と人に知る、程の者ハ、
かり初の座敷へ行共、人の雑談おも調子を
心かけて可持事に候。ふと笛所望の時、雑
談の調子にたかひぬれハ、おかしき物ニ候。
さありとて耳に立つやうに調子を吟する事、
片腹いたかるへく候。只心掛かん要と申事
二候。

右舞台にて五ヶ條。座敷にて五ヶ條。合拾
ケ條、五音の次に十体申候つるハ此事ニ候。
萬事氣遣なくしてハ諸道成へからす。殊更
笛吹は物数多き事に候但、常ニ此志肝要ニ

一、盤渉にて可吹心得之事。勧進能にても一日
候。
〔124〕

此志肝要二候十一

能にても、三番または五番迄は用捨可有。融などハ勿論の事、海士時により盤渉可然候。静成舞にも調子にえん有能、苦かる間舗候。舟弁慶、桧垣等の舞、盤渉など珍しかるへく候。さ候とて必吹候はて、不叶にては有へからず。殊更終日の乱舞などの時ハ、おなし調子迄は無文なるへし。但双調黄色の後、黄色へ分かへり候。双調迄さかり候事稀と云々。四季の調子をうけて可吹心得、対其主亭あいさつたるへし。然共秋は平調本調子なりとも、舞などハならぬ事なれハ、卒度氣遣可有之。かくを盤渉にて可吹心持、近々前にしるし候まゝ、不及沙汰候。〔125〕

126
ナシ

150

好謡笛之氣遣之事、第一、応謡調子尤なる
へし。さて舞に成時は、一越より双調迄六
調子のうちにて初終と越るならハ、初二、三
度も双調にて吹、其後ハ至而黄色盤渉の間
に不能氣遣、謡黄色ニ成候時ハ盤渉にて可
吹候事可有斟酌。但能謡によるへき問分別
肝要の由ニ候。〔26〕

127
ほうゑの事一ほ

[125] ナシ

此書大秘書也。可秘々々。

小宮山杏進昌世記

笛之口訣、一通り諷何といふ所にて何を吹と斗教る也。此書諷の何といふ所何の字から吹と書記し候事、太切の事也。夫お此書に記したる故大秘書也。

明和六年六月下旬写之

青木光通

右の書物國広より觀世彦三郎自筆にうつし取、拙者ニ被渡候。自然失候てハと存、かさねて書留置者也。仍如件。

牛尾惣右衛門尉
親類〔花押〕

慶長貳年
七月一日

小幡弔兵衛殿參